
BIJIN

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIJIN

【Nコード】

N2911BA

【作者名】

春

【あらすじ】

”美人薄命”の宿命を持つ”美人科”の人間が、短い自分の人生をどうにかするお話です。どんな内容になるのか作者にも分かりませんっ！

美人薄命

赤ん坊が母親の胎内から外へ出てくるとき、黄金の光を放ちながら生まれてくる子がいる。

その子たちは皆、”美人科”と呼ばれている。

美人科の子供たちは、玉のように美しい容姿をしているが、寿命が短い。

という”美人薄命”の宿命を背負っている。

そして今日、新たに美人科の人間が誕生した。

この子もまた、それはそれは盛大に光り輝いて生まれてきたのだ。た。

美人科に遺伝は関係しないため、生まれてこないと分からない。

その場にいた助産師や看護師たちは突然の出来事に驚き、ただただ目を丸くするだけであった。

月と青と雪。

「おぎちゃー！おぎちゃー！」

『……！……！』

温かくも豪快に光を放つ赤ん坊を目の前に、看護師たちは眼球が落ちそうになるくらい目を開いている。

『あのー看護師さんたち？早くその子を産湯に入れてくれませんか？』

『！え、ええ！そうですね』

母親の声で我に返った看護師たちは、まるで何百億もする宝石を運ぶようにその赤ん坊を産湯へと連れて行く。

産湯に浸かった赤ん坊は、まどついていた光を静かに収めた。

『それで、その子は男？女？』

『ああ、えっと、元気な男の子ですよー』

『男？エコーでは女で間違いないと言っていたのに……』

まあいいかと呟いた母親の顔は出産の疲れの他に、何やら複雑な表情をしている。

しかしその表情は次第に緩くなって、彼女は深い眠りへと落ちていった。

病室にて。

あの赤ん坊の母親が眠りから目を覚ますと、そこには長身で人当たりの良さそうな好青年が立っていた。

『…ん…青人^{あおと}』

『月！頑張ったね！ありがとう、元気な女の子だね』

『何？今なんて言った』

『うん、だから元気な女の子をありがとうって』

『女だと？あの看護師、光に目がくらんで性別も区別できなかったのか…！』

彼女は左の拳を思わず握りしめた。

『光に目がくらんでって…まさか、あの子…』

『ああ。美人科だ。間違いない』

『わーーーー！でかしたよ月ーーーー！最高ーーーー！愛してるーーーー！！』

青人は月を思い切り抱きしめようと飛びついたが、月は片手でそれを阻止した。

『やめる』

『産後のわりにすごいパワーだね』

『・・・』

月は先ほどと同じく、少し考え込んだ表情をした。

『どうしたの？嬉しくないの』

『別に。自分の子なら、男でも女でも、普通の子でも、そうでなくても・・・嬉しい』

『でしょう？君が悩んでることは分かるよ。もしかしたら僕たちよりも早くに死んでしまいかもしれない』

『・・・！』

青人のストレートすぎる発言に月は身体を硬くする。

『でもさ、生まれてきたばっかの子にそんな夢も希望もないこと考えたってどうしようもないでしょ。僕は、あの子が大きくなったら何をしようか毎日楽しくてしょうがないよ。まあ、月とあの子は絶対に僕が幸せにするから悩むことなんて何もないよね？あ、名前でうしようか？？』

『青人・・・』

前向き過ぎるほど前向きな青人は、こうやっていつも月を支えてきた。

そんな青人に月は涙を滲ませる。

『なにー？泣くほど俺のこと惚れ直した？嬉しいなあ』

青人は月を優しく抱き寄せ頬にキスをする。

『雪にしよっ』

『雪？』

いきなりの提案に月は目を丸くする。

『うん。今日はロマンチックにホワイトクリスマスだし、君に似て雪のような白い肌だったから。それに、雪のようにまっさらな人生を歩んで欲しいという願いを込めて。どう？』

『青人にしてはなかなかだな』

『お褒めの言葉ありがとう』

そして、あの赤ん坊は東雲雪しのめゆきと命名されたのであった。

雪の過去。

「お母さん、行って来ます」

『ああ、気をつけて』

あれから19年の月日が経ち、雪は19才となりアルバイト生活を送っていた。

彼女は高校を卒業後、大学へと進学したのだが、少々問題を起こして辞める羽目になってしまったのだ。

彼女は美人科の人間だが、本人はその問題が起こるまで自分が美人科であることを知らなかった。

それ故に起きてしまった問題である。

美人科の人間は、生まれた瞬間のあの光以外では区別がつかないため、親が当人に伝えるなどしないと自分では分からない。

雪は両親から何も聞かされていなかったのだ。

また、危^{きらい}玲^{れい}軍^{ぐん}という美人科の人間を区別出来る能力を持った組織が存在していて、彼らは大抵美人科の人間が年頃になると現れるのだが、雪はなぜかまだ出会っていなかった。

普通、美人科が生まれた家庭では早々に、美人薄命の宿命対策をとる。

美しい様子のままだと力を使い、寿命を削る速度が早まるため、平凡な容姿になるための訓練をすることが主な対策内容である。

いかに脱力し、力を使わずに済むかが課題であるのだ。

しかし、脱力モードに入っても無意識にビューティーモードに入ることがある。

それは人それぞれである。

食事をするときビューティーモードに入る者もいるし、運動をするときに入る者もいる。

他にも水を浴びたり、転んだときなどなど。

そして雪は夜、太陽の光が消えるとビューティーモードに入るといふなんとも不憫な美人科であった。

ビューティーモードの最大の難点。それは人格が変わるという事である。

自分が美人科の人間であることを認知している者ならそれなりの対策がとれるのだが、当然雪にその術はなく、人格が変わっていることさえ気づいていなかった。

事件当日の出来事はこうだった。

日が沈み辺りが暗くなった頃、門限5時の雪は自室にいた。

「あ、学校に忘れ物しちゃった」

もちろん昼間の雪の性格と現在とは異なる。

「どーしよー、お母さんは買い物でないし、お父さんはまだ仕事から帰ってきてない…よし！今のうちなら抜け出せる！」

何がよし！なのかは分からないが、こうして雪はそそくさと大学へと向かった。そして事が起こる。

『うわっ、ちょっとあの子見てみるよ。すっげー美人』

『マジだ！なあ、声かけてみようぜ』

どこの誰とも知らぬ男が、雪に声をかけた。

「ん？何か私に御用ですか？」

『君、暇だったらこれから俺らと遊び行かない？』

「私、今暇じゃないです！急いでます！」

『それは大変だ。良かったら俺の車に乗って行きなよ。送ってあげるから』

「本当ですか！？ありがとうございます。助かります！」

『じゃ車あっちだから。ついて来な』

「はい！」

『…くくく。何だ、あの子以外にちよろいな』

怪しげな男たちに連いていく雪。

そう、彼女はビューティーモードに入るとかなりの世間知らずとなるのだ。

そして連れられて行った先とは…

「やきとりあります…？何ですかここ。車ここにあるんですよね？」

『君って馬鹿なの？面白いこと言っね』

『ここは居酒屋。お酒飲むところ』

「居酒屋？お酒？だ、騙したんですか！？」

『まあまあ。いいから君も飲みなよ、おごるから』

「私まだ未成年です。お酒飲めません！」

『堅いこと言わない言わない。ほら、どーぞ？』

「ちよっ…んっ！」

無理やり酒を飲まされる雪。あれよあれよと空瓶が増えていく。

『良い飲みっぷりだねえ！ほらもっともっともっ！』

「はあーもう飲めまへんよー」

完全に雪が出来上がった所で店の扉がガラッと開いた。

『うわっ、やべっ！』

入り口には警察官がでーんと構えている。

どうやら店の中の誰かが警察に通報したらしい。

『君たちか？未成年者に酒を飲ませているのは！』

雪と男たちはこうして警察のお世話になった。

次の日の朝、雪はビューティーモードの自分が昨夜何をしたか、両

親にどれだけ叱られたかなどは、全部忘れてる。頭が痛い理由が二日酔いとも知らない。

「おはよう…」

脱力モード（この時点では無意識）の雪は、かなりのローテンションである。

『おはよー雪。どうかしたの？』

「ちよつと、頭が痛いの」

『…（そりゃそうだ…）』

月と青人はこれを機に、雪に美人科の事実を伝える事を決心した。

この日、大学に行くと当然のごとく教師たちが雪に問いつめに来た。しかし、何のことやらさっぱり分かっていない雪は、はあ…などと聞き流していた。

その態度に教師たちは、聞いているのか！？反省しているのか！？君はいつも大人しくて優等生なのに、猫を被っていたんだな？！などと好き勝手に怒鳴りちらす。

流石にイラつときた雪は、

「何か私、悪い事しましたか？」

と言ってしまった。

事情を噂で知っていた周りの人間たちは、もうこいつ終わったなと

いう表情をしている。

その予想は大的中し、雪は退学処分を食らったのであった。

事実を月たちに聞いた雪は、ローテンションのまま静かに怒り、一週間ほど両親との間で冷戦が続いた。

『あゝ月〜！雪が僕と口利いてくれないよ〜！！』

『私もだ。しょうがないだろ、諸悪の根源は私たちにあるんだから。青人いい加減うざい』

『っは！月まで僕を構ってくれなくなるの！？…寂しい…』

『…』

しばらくして雪の怒りが収まると、青人は必死に脱力モードについて雪に教えるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2911ba/>

BIJIN

2012年1月9日00時52分発行